



きれいな学校 輝く笑顔 ～ナンバーワンスクールを目指して！～

大久保中だより

〒338-0815 さいたま市桜区五関 2 8 2

Tel 048-852-3554 Fax 048-840-1430

Mail Address : okubo-j@saitama-city.ed.jp

それぞれの正月

～先生、餅ってこんなに旨かったんだ！～

校長 澤田純一

新しい年を迎えるにあたり、心よりお喜び申し上げます。今年も「生徒ファースト」で温かみのある学校づくりに邁進します。よろしく願いいたします。

さて、皆さんは新年をどのように迎えたのでしょうか。心新たに気持ちを入れ替えて、今年の希望を胸に刻んだことと思います。やはり、節目となる正月という古来からの行事は必要です。私は 53 回目の正月を迎えました。ほろ酔い気分で除夜の鐘を聴きつつ、心静かに年を越すことが近年のルーティンとなっています。今一度、53 回の正月を振り返ってみると、様々な正月がありました。今日は、その中でも思い出に残っている正月の話をしてしまおう。私がまだ幼稚園の頃の話です。当時、日本は高度成長期を迎え、人々の暮らしは豊かになりつつありました。一方、貧しい家庭もあり、必死に毎日を生きる人々も少なくありませんでした。（ちなみに、澤田家は白黒テレビ 1 台、電話なし、クルマなし、電子レンジやエアコン、そして録画ビデオは発明されていませんでした。）しかし、人々は新たな時代に希望を抱き、揚々と新年を迎えていた時代でした。そんな中、私の父も家族のために懸命に働き、そのおかげで正月には餅を食べることができました。年の瀬のある日、A 君という中学生が突然我が家にやってきました。父が連れてきたのです。父は越生町の中学校で英語の教師をしていました。その担任をしていたクラスの A 君を連れてきて、いつしか一緒に生活をするようになりました。私は、A 君を「お兄ちゃん」とよび、兄ができたような感覚を覚え、嬉しくてたまりませんでした。A 君も幼い私とチャンバラごっこなど、よく遊んでくれました。年が明け、3 学期が始まりました。当時は給食がなく、昼食は家から弁当をもっていくことになっていました。父は A 君に言いました。「弁当は好きなものを言え。絶対に遠慮するな。」と。毎日、母は「お弁当は何がいい？」と A 君に聞きました。A 君は、来る日も来る日も、「餅をお願いします。」と母に頼んでいました。ある日のこと、父は、A 君が遠慮して毎日「餅」と言っていると思ったのでしょうか。実直な父は、それが面白くなかったようです。「遠慮するなと言っただろう！」と大きな声を出しました。A 君は「先生・・・違うんだ。遠慮しているわけではないんだ。俺、餅がこんなに旨いとは知らなかった。俺は、毎日餅が食べたくって、弁当にしてもらったんだ。」

後から聞いたのですが、父は A 君の生活ぶりを心配し、担任として放っておかず、我が家に連れてきたというわけです。そして、いつしか A 君は自宅に帰っていきました。

曲がったことが嫌いな厳格な父でしたが、心配した生徒を家に招き、共に生活するという優しさもあったのだと思います。そんな父が「遠慮するな！」と叱り、A 君は素直に「餅がうまい」と言った教師と生徒のやり取りが、校長として、ちょっといい話に、ほほえましい話に思えてきたのです。これは、昭和の、ある正月の話です。

新年最初の話は、これでおしまい。また、2 月号でお会いしましょう。今年もよろしく！